

甘粛省の史跡と文化財

新堀 道生*

筆者は秋田県・甘粛省文化交流事業の交流員として、平成19年5月18日から12月14日まで中国甘粛省に派遣され、甘粛省文物考古研究所で研修する機会を得た。その研修期間中、幾度か省内の史跡や文化財を見学することができた。甘粛省は世界文化遺産・敦煌莫高窟をはじめ、文化財の豊富な地域である。本稿ではまず中国における文化財保護の制度を紹介し、ついで甘粛省の地理的位置とからめて省内の史跡と文化財を概括的に紹介してみたい。

1. 文化財保護の制度

日本でいう有形の文化財を、中国では一般に文物とよんでいる。文物を二つに分けて、不可移動文物、可移動文物とよぶ。前者は史跡や石碑のごとく移動できない文物、後者は美術工芸品のごとく移動可能な文物をさす。

不可移動文物の保護制度として、①文物保護単位、②歴史文化名城・街区・村鎮がある。①は史跡、考古遺跡、石碑などを対象とするもので、わが国でいう史跡に近いが建築物も含まれる。「単位」は「地点」というほどの意味である。文物保護単位については、管轄する県級以上の地方政府が保護の専門機構あるいは責任者を決定し、また保護範囲を設定し、その範囲内では新たな建設事業が禁止される。②は都市や集落そのものを対象とするもので、わが国でいう伝統的建造物群保存地区に近い。個々の建築など有形の物体を対象とする制度ではなく、集落をまるごと指定し、管轄する県級以上の地方政府に保護規則の策定を義務づけるという方法である。①は国家級・省級（含自治区・直轄市）・市級（含自治州）・県級、②は国家級と省級の区別がある。甘粛省内には2007年現在、文物保護単位が国家級72カ所、省級512カ所、歴史文化名城は国家級4カ所、省級7カ所がある。

可移動文物の保護制度としては、その軽重に応

じて一級文物、二級文物、三級文物という分級管理がなされている。それ以外のものは一般文物とよばれる。一級文物はわが国でいう重要文化財にあたり、国が管理権をもつとされる。博物館では所蔵する一級文物について、専用の保管棚を設け、記録台帳を国の文物局に提出することが義務づけられている。甘粛省の博物館が所蔵する一級文物は3240件、二級が1万1386件、三級が9万6299件である（2006年）。

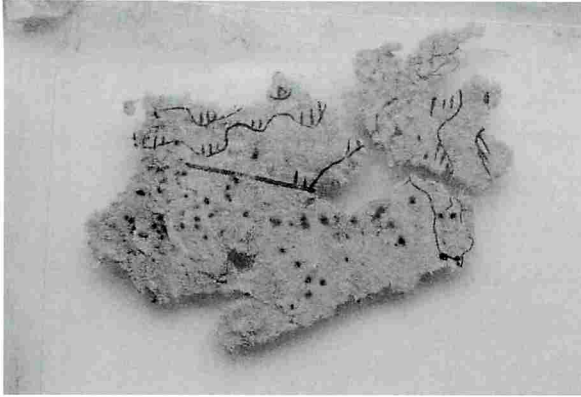
今世紀に入って、中国では文化財の保護が急速に充実してきている。文物保護単位の指定は1961年に開始されたが、2001年以降の指定数はそれ以前の2倍にのぼっている。甘粛省内でも同様の傾向がみとめられる。当然ながら、文化財を保存・利用するための機構整備も急がれるわけで、省内では博物館や文物局の新設が相次いでいる。

有形文化財の保護制度に対して、近年「非物質文化遺産」の保護制度が新たに誕生した。これは伝統行事、伝統芸能や民間工芸の製造技術などを対象とする制度であり、わが国でいう無形文化財や民俗文化財にあたる。04年、中国がユネスコの「非物質文化遺産保護公約」（日本語では「無形文化遺産の保護に関する条約」）に加盟したのに伴い、保護の制度化が進んだ。国レベルの第1回の選定は06年5月に公表され、文学、音楽、舞踏、伝統演劇、曲芸、雑技・競技、民間美術、伝統手工芸、伝統医薬、民俗の各分野から518件が指定された。この制度の大きな特徴は、当該の文化財を保持する個人や団体を特定しなくても、申告地区または申告組織があれば選定可能という点である。したがって、春節・七夕のごとく、特定の地域や集団に限定できないものを選定することが可能となっている。伝説などの口碑も、地域を特定すれば選定することができる。そのほか、少数民族の文化が多く含まれる点や、漢方薬や太極拳が選定されているのは、いかにも中国らしいところかもしれない。

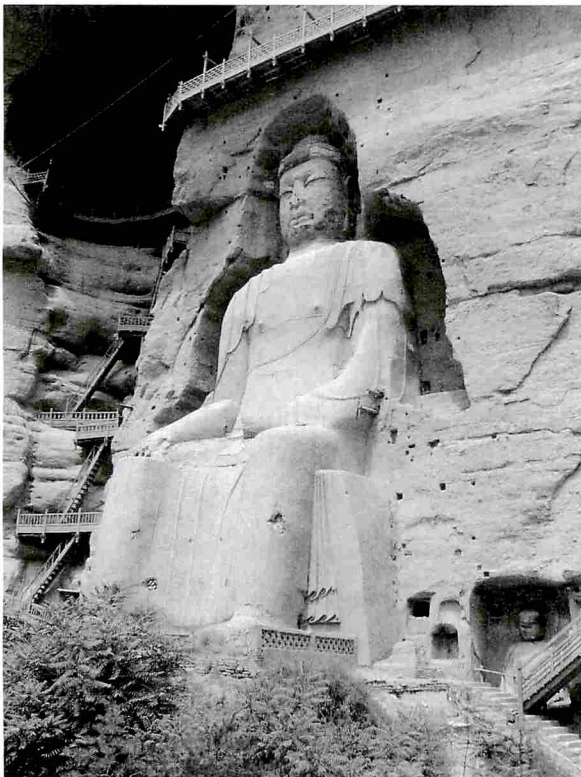
* 秋田県立博物館

2. シルクロードの遺産

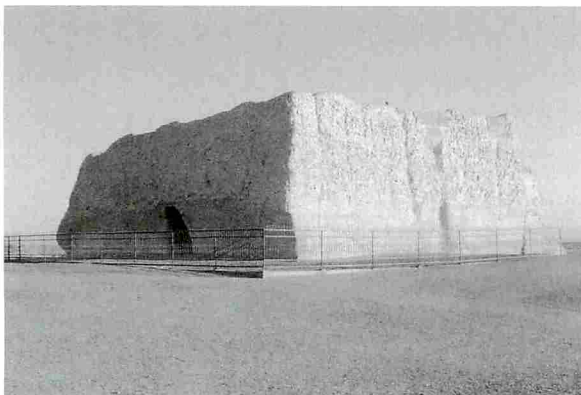
2006年段階で甘粛省内の博物館が所蔵する文物は42万件余りであるが、とくに戦国時代や漢代な



放馬灘紙



炳靈寺石窟（臨夏回族自治区）



玉門関（敦煌市）

ど古代の貴重資料が多い。天水市放馬灘遺跡からは現存世界最古の紙が出土している。前漢の文帝・景帝（B.C.180-141）のころのものと推定され、現在は甘粛省文物考古研究所が所蔵している。甘粛省の乾燥した気候は、こうした古い脆弱な資料の保存に寄与している。

甘粛省の史跡のなかで敦煌莫高窟（敦煌市）はとみに有名である。世界文化遺産であるとともに中国・甘粛省の国家級・省級の文物保護単位でもある。仏教東漸を如実に示す石窟であるが、ほかにも省内には大小あわせて100余りの石窟があり、石窟寺院の多い地域である。炳靈寺石窟（臨夏回族自治区）にある西秦（五胡十六国の一つ）の時代の仏像は、インドグプタ朝の様式の影響を明瞭にあらわしている。炳靈寺もまたシルクロードの旧道に位置する史跡である。甘粛省は西域の玄関口にあたり、関連する史跡や文化財はすこぶる多い。甘粛省博物館の人文系の常設展示が「シルクロード展示室」と「彩陶展示室」に分けられているのも、そうした地域性をとらえたものである。甘粛省は新石器時代の彩陶土器の出土地として有名で、彩陶は「祖国の瑰宝」とも称せられ、同省では収集家も多く広く親しまれている文化財である。同館の彩陶の展示解説においては、彩陶土器と西アジアなど西方の器形との類似性が説かれており、こうした国際色の豊かさは甘粛省の文化財の一つの特色である。

甘粛省の蘭州市を流れる黄河以西から敦煌にいたる、細長く伸びた砂漠地帯を河西回廊とよんでいる。周知のごとく前漢の武帝の時代に、西域との交誼をもとめて、この地に勢力が及ぼされた。その象徴的な遺跡が漢代長城であり、玉門関、陽関などの軍事・政治拠点の遺跡である。

河西回廊の古代の遺跡からは居延木簡、敦煌木簡など、当時の政治を知るうえで貴重な資料が多数出土している。省内出土の木簡は6万点余を数え、とくに漢代木簡は国内総数の8割を占める。その保護と研究を進めるため、07年10月、甘粛省では甘粛木簡保護研究センターを設立した。

3. 多民族性

甘粛省は漢族と北方・西方の諸民族とが居地を

接する地点にある。河西回廊の中央政権による支配は、漢代以降しばしば弱体化あるいは強化され、ある時代には漢族以外の支配するところともなった。11～13世紀に河西回廊一帯を支配した西夏は、井上靖の小説の題材としてもよく知られるが、チベット系タンゲート族が建設した国家である。彼らが漢字をもとにみだした西夏文字の資料も省内に伝わり、省博物館の常設展示で間近に見ることができる。代表的な遺物として西夏碑（武威市）がある。西夏はモンゴルによって滅ぼされたが、チンギス・ハンは西夏攻略の陣中で病死しており、また張掖市の大仏寺はフビライ・ハンの生誕地とされ、甘肅省にゆかりが深い。

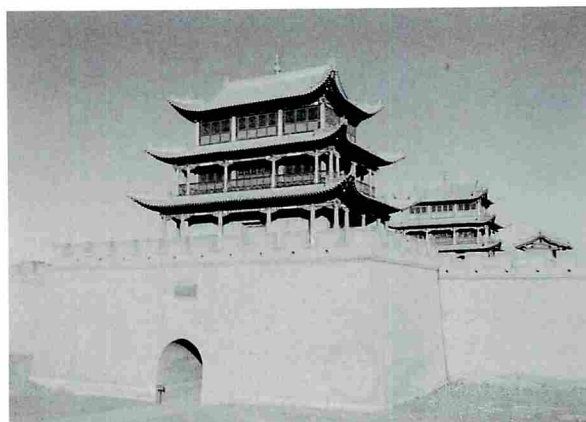
青銅器は中国の文化財としてなじみ深いものの一つであるが、甘肅省内でも今なお出土が続き、甘肅省博物館の青銅器は同館のコレクションの一大特色をなしている。そのなかには遊牧民の文化を反映したものもあり、展示室には羊の大敵である狼を表現した青銅器や、オオツノジカをかたどった装飾品が展示されている。こうした多民族性は甘肅省の文化財の一つの特徴である。

4. 早期秦文化

甘肅省の東隣は、かつて長安と称した西安を省都とする陝西省である。もともと陝西省と甘肅省の東部とは関係が深く、秦腔といった伝統劇や食生活などで共通の文化を有する。陝西省といえは秦始皇帝の兵馬俑が著名であるが、始皇帝の祖先はもともと甘肅省の域内を勢力としていた。天水市周辺がその活動地域であり、天水の古称を秦州という。省内では早期秦文化の遺跡発見が相次いでおり、省博物館には礼県大堡子山遺跡で出土した「秦公」の字が刻まれた青銅器が展示されている。2006年の同遺跡の発掘は、全国十大考古発見の一つに選ばれた。全国統一前の秦の根拠地がどこにあったかも含めて、今後の発掘成果が注目されている。

5. 無形文化財

甘肅省には様々な民俗行事や伝統工芸など特色ある無形文化財が伝存する。先述のごとく2006年5月に中国の非物質文化遺産リストが公表された



嘉峪関（嘉峪関市）



礼県大堡子山遺跡（隴南市）

が、そのなかに甘肅省からは武威市・酒泉市の「河西宝卷」（民間文学）、康楽県の「花儿」（民間音楽）、蘭州太平鼓（民間舞踏）、武威市の「涼州賢孝」（曲芸）、慶陽市の「慶陽香包繡製」（民間美術）、酒泉市の「夜光杯雕」（同）、臨夏県のレンガ彫刻「臨夏磚雕」（同）、天水市の「伏羲祭典」（民俗）など、17項目が選ばれている。

同様に蘭州市が 07年に公表した非物質文化遺産リストでは、羊の皮でつくった筏である「羊皮筏子」、ヒョウタンに図柄を刻む工芸品「蘭州刻葫芦」、全国的に有名な蘭州料理である牛肉ラーメンの製造技術などが選定された。

このうち蘭州太平鼓は数十の太鼓が群舞する勇壮なもので、保存団体が技術を伝承し、市内の各種イベントでも活躍している。甘肅省は牛・羊肉の料理が豊富な地域であるが、蘭州太平鼓も牛の皮を張った太鼓を使用している。羊皮の筏、牛肉ラーメンとともに、当地の特色をよくあらわすものといえる。慶陽市の香包、酒泉市の夜光杯、蘭州市の刻葫芦（ヒョウタン細工）は、土産品とし



刻葫芦 蘭州市にて



剪紙 伏羲と女媧

て広く普及し市中の随所で見ることができる。天水市の伏羲祭典は旧暦5月13日に同市の伏羲廟で執り行われる。伏羲は三皇の筆頭として、中国人なら誰でも知っているというほど有名な祖先神で、天水市はその出身地と目されている。伏羲の図像は戦国時代の墓や絵入りレンガなどにたびたび描かれたが、現在も省内の剪紙（切り紙細工）の図像にその姿を残している。甘粛省の剪紙は、

伏羲の図像やトーテム的図像など古い形態を残すことから、研究者からは「生きた化石」とも呼ばれ、今なお農村の女性を中心に制作が続けられている。剪紙もまた中国の非物質文化遺産に選定されている。

ところで、こうした地域の文化財は住民にどう受け取られているのだろうか。意識の問題であるから容易に論じがたいが、たとえば日本では祭礼などの主要な伝統行事は、新聞に期日が掲載され、祭礼の様子が報道されたりもする。中国では滞在中そういった報道がほとんど見られなかった。また日本では街を歩くと、史跡名・旧町名などを記した標識を、あちこちで見かける。中国ではそうした標識はあまり見かけない。むろん敦煌や嘉峪関のごとき古い史跡はよく整備されているが、たとえば省都・蘭州はかつて金城とよばれた城下町でありながら、城壁や建築物の跡を示す標識はない。あたかも近い年代の歴史あるいは地方史への関心が薄いように見える。各地の博物館の展示品も考古遺物が中心で、悠久なる文明の歴史を語るといったようなスタイルが多い。

一方、07年3月には甘粛文化出版社から『甘粛史話』が刊行された。これは甘粛史話叢書というシリーズのうちの1冊で、ほかに『蘭州史話』『天水史話』など全15冊が刊行されている。また07年11月には、甘粛省の地方テレビ局が省の歴史をたどる特別番組を制作し、中国中央テレビで放映する旨の報道があった。インターネットでは無形文化財を観光資源としてどのように生かすかという議論がかまびすしい。そうしたところからみると、地域の歴史への関心も高まってきているようである。好調な経済発展に支えられて、甘粛省はもちろん中国全土で博物館や文化館といった文化施設の建設がさかんであり、今後ますます地域の文化財への認識が高まっていくのではないかと想像される。